

# 縄文時代晩期における環境適応の一環としての生業構造の特性について

愛知県渥美郡渥美町(現田原市)伊川津遺跡を一例に

On a characteristic of the subsistence structure as an environmental adaptation in the latest Jomon period - at Ikawazu site, Aichi pref.

学籍番号 36735

氏名 平林 利文

指導教員 佐藤 宏之 助教授

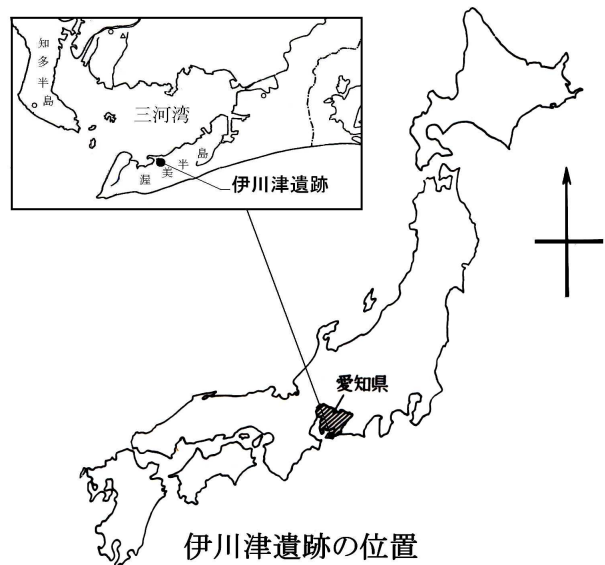
## 1. 研究の背景・目的

海岸部の縄文時代遺跡は、その生活の一端を窺い知りうる痕跡として、しばしば貝塚の堆積を残す。E・S モースによる大森貝塚の発掘により、日本考古学の黎明が告げられたことはよく知られている。このように日本の先史時代を知りうるための素材としてその重要性はつとに認識されてきた。日本列島には数多くの貝塚が存在し、金子浩昌によれば日本列島沿岸部には約 1000 の縄文貝塚があり、そのおよそ 8 割は東海・関東・東北の太平洋岸に集中している。具体的には三河湾・東京湾・仙台湾においてそれは特に稠密である。その中で、本研究においては三河湾沿岸の渥美半島地域を対象として採り上げる。

三河湾沿岸地域は日本列島の中において東京湾・仙台湾沿岸域と並ぶ貝塚集中地域である。東京湾・仙台湾の両地域においては、既にこの地域に特化したあつい先行研究が存在するが、三河湾域においては前二者に比してそれほど多くはない。

そこで、本研究は縄文時代人が年間を通じての食糧を確保するために、資源環境に対する適応戦略を把握することが、彼等の文化的・社会的な性格を理解する上で重要な課題の一つであるという認識に基づき、愛知県渥美郡渥美町(現田原市)伊川津遺跡を一つの例としてとり、そのなかで漁撈活動に注目する。そして、漁撈技術とその獲物の構成を主眼に据え、そこに現れる環境

適応の特性と安定性をあきらかにすることを目的とした。



伊川津遺跡の位置

## 2. 研究の方法

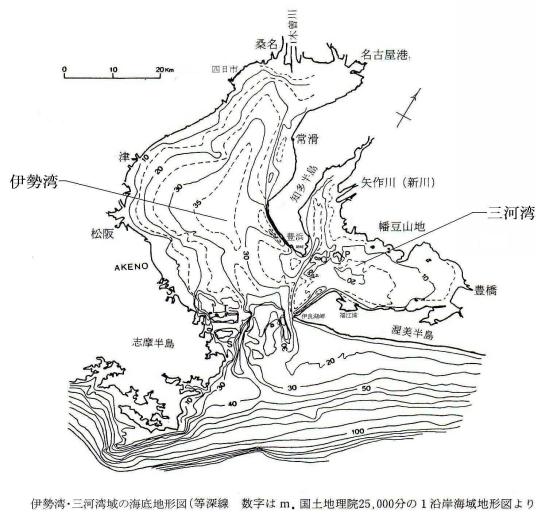
出土遺物 / 動物遺存体の考古学的分析に加えて、漁撈技術を中心とした生業構造の特性をよりあきらかにすることを目指すために、現存する民族(俗)例及び文献史資料に現れている過去の漁撈民の姿を参照枠とする、所謂民族考古学(ethno-archaeology)といわれる方法をここでは採用する。無論、単純な比較 / 類推が孕む種々の誤謬を看過するつもりはないが、しかし、漁業技術に関する限り、環境特性・水産資源特性に規定される側面が強く、伝統的な技術が長期間にわたって保持される傾向が既に民俗学等隣接諸分野によりあきらかにされている

ので、参照枠としての有効性は一概に否定されるべきものではないと考える。加えて、漁具や漁法といったものが地域的懸隔を越えて酷似する様相を呈する例が、地理学のサイドからも報告されている。

### 3. 環境特性(三河湾及び渥美半島について)

#### 3-1: 海洋環境

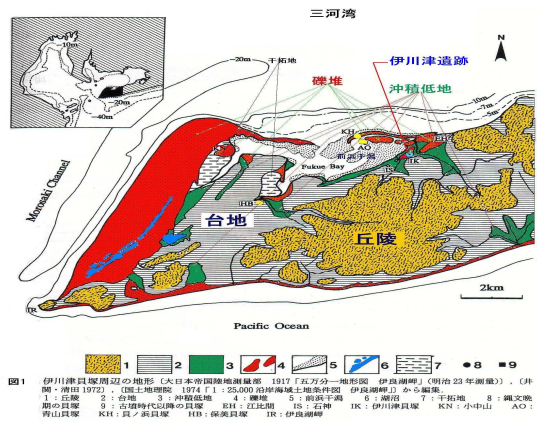
伊勢湾の横腹に接する三河湾は、広義には伊勢湾に内包され、その水深は両者とも総じて浅く、伊勢湾(名古屋港に面する狭義の)の平均水深は約 20mで最深部でもおよそ 30mであり、三河湾に至ってはさらに浅く平均水深は 9m余りに過ぎない。湾口の伊良湖水道には局所的に水深 100m に達する所もあるが、外洋に至ると再び浅海となり大陸棚斜面に連続する。



#### 3-2: 地形(渥美半島)

大きく丘陵・台地・海岸礫堆・沖積低地に区分される。台地面は全体に三河湾側へ傾斜しているため、河川は北流するものが多く、このため三河湾側では開析谷が多く見られる。これらの谷には全体に小規模であり、谷底には沖積低地が広がっている。また福江湾岸および半島先端部では顕著な礫堆の形成が認められる。最内列の礫嘴は、

江比間 石神間の谷口を結ぶように断続的に形成されており、縄文海進時に形成された旧浜堤と推定される。



#### 3-3: 漁業生物相

三河湾の生物は基本的には汽水性・内湾性の魚貝藻類を基本として沿岸性のもので構成される。

魚類	コノシロ	マイワシ	カタクチワシ	マサバ
	マアジ	ヒイラギ	スズキ	クロダイ
	シマイサギ	キビレ	マダイ	キス
	マアナゴ	ボラ	アユ	ウナギ
	マルハゼ	メバル	タケノコメバル	クジメ
	アイナメ	マゴチ	ヒラメ	マコガレイ
	イシガレイ	メイタガレイ	クロガシラカレイ	ウシノシタ
	カワハギ	ギマ	コショウダイ	ツルマキ
	マエソ	サヨリ	イシモチ	アカエイ
	ムツ	ヤマトカマス	アカカマス	マルアジ
	ブリ	カンパチ	ヒラマサ	イシダイ
	テンジクダイ	コトヒキ	イボダイ	イシガキダイ
	ヘダイ	キューセソ	ネズボ	アイゴ
	ギンボ	ウマズラハギ	トラフグ	サバフグ
メジナ	ヒメジ	ホウボウ		
貝類	ヤマトシジミ	タイラギ	イタボガキ	
	アカガイ	ミルクイ	オニアサリ	
	トリガイ	バカガイ	ツメタガイ	
	サルボウ	ウチムラサキ		
	アサリ	イタヤガイ		

#### 3-4: 歴史環境

三河湾域は縄文時代後期後半から晩期前半にかけて貝塚形成が活発化する地域であり、縄文時代を通じても知多半島とあわせて愛知県内のおよそ半数の貝塚の存在を見る地域であるが、晩期後半に入ると渥美半島域を除いて途絶する。また、半島内部においても地域差が見られ、豊橋市域においては貝殻だけの大形貝塚を成し、三河湾口

域即ち渥美半島先端部域では活発な漁撈活動を展開する貝塚がみられる。主たる遺跡として、伊川津以外に、渥美半島の付根部である豊橋市域に水神、大西、さんまいなどの貝塚や、伊川津周辺には保美、川地、吉胡、大本などが確認されている。

#### 4. 伊川津遺跡の漁撈

##### 4-1：遺跡概要

伊川津遺跡：縄文後期末から晩期中葉を中心とする遺跡であり、土器型式編年では寺津下層式/伊川津 式期～保美 式/本刈谷式期に相当し、およそ2300～3000年前と考えられる。既述のように海況、生物相は典型的な内湾水域で、伊川津遺跡形成当時の周辺海況も基本的には現在と同様であったと考えられ、加えて遺跡は、当時三河湾に直面していた可能性が高い。

##### 4-2：漁撈技術と主たる獲物

漁撈関連出土遺物として考えられるものとしては、まず骨製刺突具が卓越し、ついで石錘と根挟み、骨製ヘラなどの出土が確認されている。また、釣針に関してはそれと思しき骨角器が一点出土しているのみである。

骨製刺突具は長さ4-14cmほどの逆刺のない単純な形状で、柄の先に固定されヤスとして用いられた可能性が考えられる。しかし、発掘報告書の報告者は、慎重な立場から、生業関係遺物であることは認めつつも、この棒状骨角器を「ヤス」とは認定していない。また、石錘は網漁に用いたものとするのが妥当である。

魚類の獲物としては、内湾性のクロダイ属がほぼ半数を占め、同じく内湾性のヘダイ・スズキ属、広域性のエイ類・フグ科、外洋性のマダイがこれに続いて、遺存体として確認されている。また、小型魚として

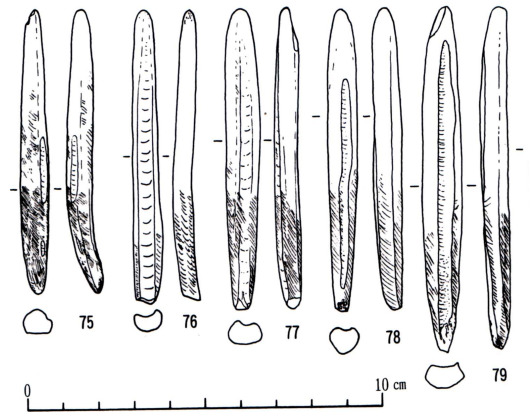
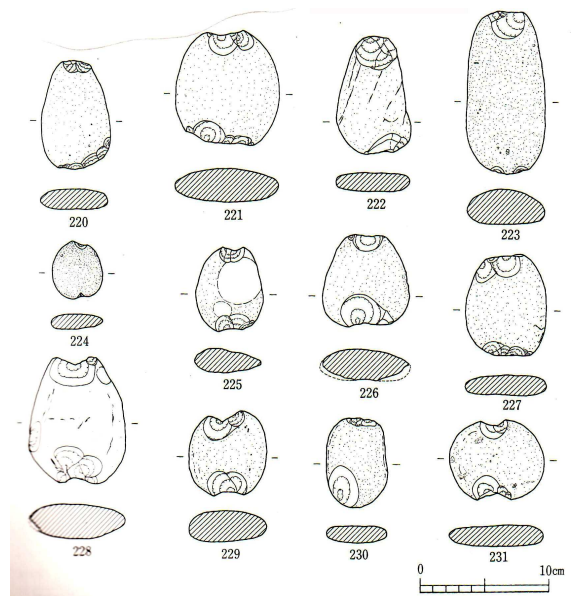
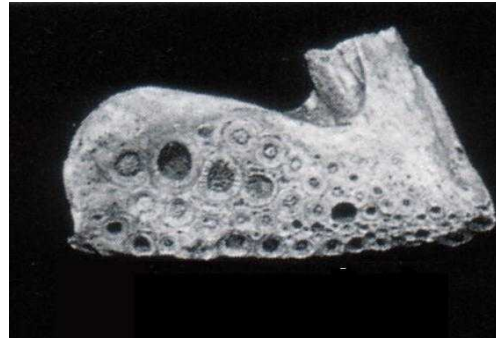


図94 骨角器・棒状刺突具(60～81)

は、ニシン科、岩礁性のものが多く、サメ類が少なく広域性のフグ科・ボラ科・ハゼ科・ウナギなど多様な内湾性・淡水・汽水種が多い。また、特異なものとして、サケ類の椎骨の出土が確認されている。全般に大型魚より小型魚の遺体が稠密に出土し、小型魚への選好と、網漁への傾倒が窺える。





また、貝類としてはアサリが通年で捕獲されているのをはじめ、内湾砂底性の二枚貝類と岩礫性巻貝のスガイなどが多い。そのほかハマグリ・オニアサリ・シオフキ・オオノガイ・マガキ・イガイ・イボニシなどが見られる。



シオフキ



マガキ

マガキ



オニアサリ



オオノガイ



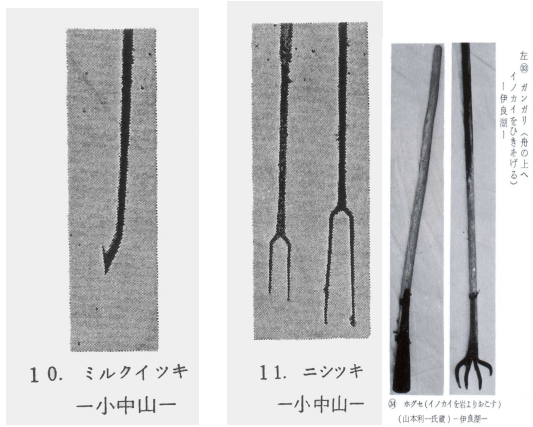
イガイ

5. 民族(俗)例について。

三河地方～渥美半島にかけて、近代に至るまで網漁が主体だが、一方で近代以降廃れたと思われる刺突漁の伝統が豊橋～渥美

半島一帯に残存しており、その道具類も各種伝えられている。また、視点を広く伊勢湾全体志摩・熊野灘まで広げれば、海人(海士・海女)の存在に象徴されるように、潜水漁の伝統があつく存在する。

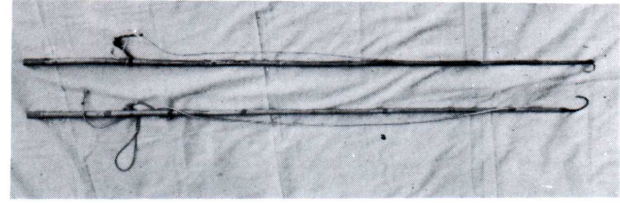
伊川津遺跡の立地する渥美半島においても、貝採取や魚類捕獲に刺突具を用いていた伝統の存在が民俗誌として残されている。



10. ミルクイツキ  
—小中山—

11. ニツキ  
—小中山—

12. ヒツカケ(イノガイを採るのに用)  
—山本利一氏蔵—



35 ヒツカケ(山本利一氏蔵) - 渥美町伊良湖 - 潜水用

6. 終わりにあたって

以上にわたって、伊川津遺跡をひとつのサンプルにその環境適応および生業構造の特性を見てきたわけだ。結論めいたことを述べる事が出来るかどうかは、甚だ疑問ではあるが、ひとつのファインディングスめいたこととして、第2章で指摘したように、一見大きく変わっていったように見えることでも、その実本質的なことではさしたる変化はなく、非常にサステイナブルであるということであろう。漁撈技術が、楠本政助が示した原則を縄文時代以来ほとんどはみ出てこなかったということは、留意すべき重要なことではなからうかと思う。